

農家レストラン「おがわ作小屋村」から見える 地域づくりのヒント

—宮崎県西米良村からのレポート—

研究員 大友 和佳子

目次

- | | |
|------------------------|----------------------------|
| 1. はじめに—なぜ、今「地域づくり」なのか | 4. 「おがわ作小屋村」から見える地域づくりのヒント |
| 2. 宮崎県西米良村概要 | 5. 「おがわ作小屋村」の地域への効果 |
| 3. 農家レストラン「おがわ作小屋村」概要 | 6. おわりに |

1. はじめに—なぜ、今「地域づくり」なのか

近年、「地域づくり」という言葉が、声高に叫ばれている。「地域づくり」の背景は多様で、その方法も様々である。民俗学者の結城登美雄^[1]は、「地域づくり」について次のように述べている。

「地域ってなんだろうかと考えると2つのテーマが見えてきます。1つは、家族の集まりである地域をどのように良くしていくか。もう1つは、みんなが悩んでいることをどのようにして解決していくか。地域づくりとは、我が家族のことを考え、近隣の家族のことを考え、良くするために支えあったり協力しあったりしていくこと。それが原点です。外の地域づくりのプロフェッショナル、と言われている人たちの意見が主体ではなく、そこに暮らす人々が主体です。」

結城の考える地域づくりの考え方によれば、あくまでもその地域で暮らす人々が地域づくりの主体である。自分、家族、近隣の人々が直面する「生きる上での困難」をどのように協働して解決できるのか。それを考え、「暮らす場としての地域」を再生すること。それが地域づくりと言える。

こうした視点から、本稿では宮崎県西米良村の農家レストラン「おがわ作小屋村」構想を紹介し、そこから「地域づくり」のヒントを導き出したい。調査は、2019年の10月に実施した。

2. 宮崎県西米良村概要

宮崎県西米良村は、宮崎県の中西部、熊本県との県境に位置する辺境の村である。2018年現在の人口は1,181人で高齢化率は42%、総面積271.56km²の内、96%は山林が占める。

農家レストラン「おがわ作小屋村」は西米良村の中でも、人口が少ない小川集落に位置

(写真1) 小川集落写真



(出所) 著者撮影

する。小川集落の人口は2018年時点で92人、その内65歳人口は54人で高齢化率が58.7%である。

西米良村は、昭和30年代に林業で栄えた村である。しかし林業の衰退とエネルギー革命によって過疎高齢化が一気に進展した。だが、西米良村は様々な人口政策によって全国的にその名を知られる村でもある。代表的な政策には、都市から田舎への労働交流人口を呼び込む日本初のワーキングホリデー制度などがある。他には、I・Uターン向けの住宅の整備、直売所による交流の促進などがある^[2]。

3. 農家レストラン「おがわ作小屋村」概要

次に、本稿の中心テーマである農家レストラン「おがわ作小屋村」を紹介する。「おがわ作小屋村」は、「作小屋」という伝統的な建物を使用している。

提供している料理は郷土料理で食材は100%西米良村産である。調理は村内の女性が担っている。メインの客層は宮崎県内の他の地域で、美味しい食事と景観が売りである。客層の7割は女性で主に自家用車で訪れている。

「おがわ作小屋村」の目玉は、「おがわ作小屋 四季御膳」である。郷土料理の担当は、地域の婦人会の女性達である。婦人会で、地域のお葬式や法事などの行事のお弁当づくりを担当して培ったスキルを活かしている。勤務しているのは、パートの女性9名、事務局が5名の計14名である。料理を担うパートの女性の平均年齢は70歳で最高齢は83歳である。

また、「おがわ作小屋村」には宿泊施設「桃源郷の宿」としてバンガローもある。バンガローは朝夕食事つきで3,500円である。部屋から見える山村の風景も美しく、人気である。

(写真2) 農家レストラン「おがわ作小屋村」
外観



(出所) 著者撮影

(写真3) おがわ作小屋村 四季御膳



(出所) 著者撮影

(写真4) 「おがわ作小屋村」バンガロー



(出所) 著者撮影

4. 「おがわ作小屋村」から見える地域づくりのヒント

次に「おがわ作小屋村」から見える「地域づくり」のヒントについて伝えたい。

(1) 住民の「危機意識」の共有と「地域協議会」の形成

まず注目したいのは、運営主体についてである。「おがわ作小屋村」の運営主体は、地域の人々で構成される「地域協議会」である。メンバーは、総勢27名で、運営方法について話し合いを重ねている。事前の会議は計100回以上に渡り、「地域が消滅の危機である。何とかして地域を存続させよう。」という想いを共有した。

こうした「危機感」の共有は、地域づくりにとって重要な鍵となる。「はじめに」で述べた通り、地域づくりの主体は、そこに住む住民たちであるからだ。「おがわ作小屋村」の特徴であるかやぶきの屋根も、地域協議会の人々で作った。食材も地域の人々が提供している。

(写真5) 「おがわ作小屋村」運営協議会のメンバーと行政担当者



(2) 景観研修（地域の景観を統一）

次に注目したい点は「おがわ作小屋村」を立ち上げるために、「景観」が重視されている

点である。地域協議会のメンバーは、立ち上げにあたって、湯布院等の農村観光の先進地域に研修に行っている。

そこで、農村観光の成功の秘訣には、地域の景観の統一が重要であることを学んでいる。桜の植樹や集落内の環境整備を住民自らが率先して行い、景観の美しさを保っている。

(写真6) 桜の植樹の風景



(3) 地域づくりへの女性の参画

また、「おがわ作小屋村」構想を支えている大きな力に女性の力がある。郷土料理づくりを担い、女性ならではの細やかな気遣いによるおもてなしが好評である。

地域協議会の会議には女性を迎え、活発な意見交換をしている。地域づくりの鉄則として、女性が生き生きすると地域全体が活性化するということが言われている。大切にしたい点である。

(写真7) おがわ作小屋村運営スタッフ



(4) 地域文化の活用

さらに、郷土料理や作小屋等地域文化を残す方向で運営している。

2019年10月から12月にかけて実施した「おがわ作小屋村」へのアンケートでも、客が魅力を感じる点は「食事の内容」が、景観、雰囲気等を抜いて一位だった。郷土料理の採用を決めたのは村長のアイデアで、地域の独自性を打ち出すためである。農家レストランの運営にとって、メニューの選択は重要である。郷土料理の活用によって地域の独自性を打ち出すアイデアにはヒントを得たい。

5. 「おがわ作小屋村」の地域への効果

次に「おがわ作小屋村」の地域への効果である。先ず年間客数と売上についてである。図1に、「おがわ作小屋村」、図2に宿泊施設である「桃源郷の宿」の年間客数と売上高について示した。

レストランの年間客数は、立ち上げ時の2009年が15,000人で、その後2013年が23,389人でピークを迎え、2018年は13,413人である。

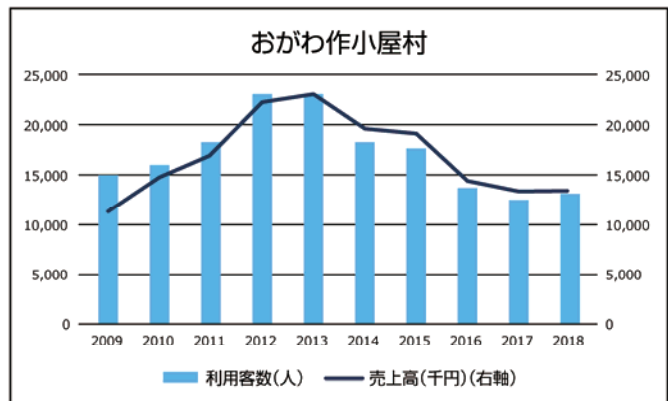
売上高は、2009年が11,277千円、2013年が23,414千円でピークであり、2018年が13,768千円である。

桃源郷の売上高は、2009年が1,424千円、ピークが2015年で5,124千円、2018年は3,986千円である^(注)。

(注) 2011年から2013年にかけて売上高が高いのは公共事業などの影響である。2016年以降の売上の減少は熊本地震の影響である。

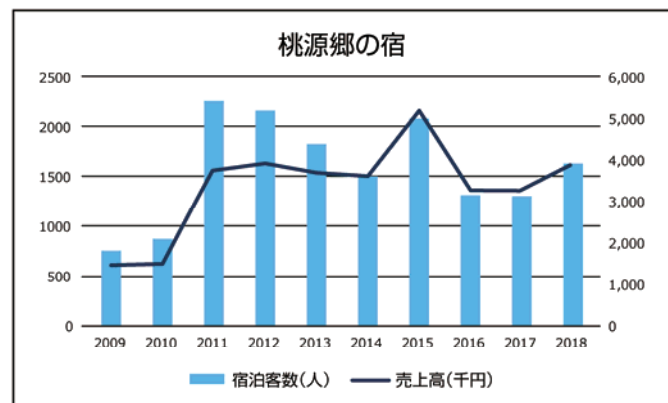
また、「おがわ作小屋村」を通し西米良村を知り、移住者が現れ始めている。平成21年以降の小川集落の移住・定住者数は17名で、2018年までに小川集落内で4人の子供が生まれている。高齢者がほとんどを占めていた小川集落に、子育て世代が移住してきたことは、村人の希望になり大きな喜びとなっている。

(図1) 「おがわ作小屋村」利用客数と売上高



(出所) 「おがわ作小屋村」から資料提供

(図2) 「桃源郷の宿」利用客数と売上高



(出所) 「おがわ作小屋村」から資料提供

最後に「おがわ作小屋村」の課題についてであるが、現在の「おがわ作小屋村」を運営している女性スタッフの平均年齢は70歳を超えており、後継者となるマンパワーの確保が緊急の課題である。

しかし、西米良村のような山村での暮らしに興味のある若い層は存在する。そのような志向を持つ若年層が職業として選択できるように「おがわ作小屋村」の産業としての運営形態を検討していくことが、重要であろう。

6. おわりに

最後に、農家レストラン「おがわ作小屋村」から見える地域づくりのヒントについてまとめたい。

第一に、危機感の共有と地域協議会による住民主体の運営形態である。地域づくりの成功には、住民の気持ちが多まり連携がうまくいくことが重要である。そのために地域協議会を作り、危機感を共有した方法は、大いに参考にしたい。

第二に、地域の生活文化（あるものとしての地域資源）を観光産業へとつなげている点にも注目したい。「そこにあるものの価値に気付くこと」が地域づくりの出発点ともいえるからだ。

そして、第三に、地域づくりへの女性の参画も重要な視点である。

宮崎県西米良村がこれから急速に人口を回復させることはないだろう。しかし、足下の価値を発見し産業を創り、コミュニティを結束させる姿からは、今後の地域における「小さな経済」の姿を見出せると思うのである。

（参考文献）

- [1] 結城登美雄 NHK地域づくりアーカイブス
<https://www.nhk.or.jp/chiiki-blog/900/280194.html>
- [2] 中島正博（2015年）「宮崎県西米良村の人口減少対応策の成果と課題」、経済理論380号、p. 49
- [3] 前田豪（2004年）『西米良村の挑戦』、鉾脈社
- [4] 神野直彦（2002年）『地域再生の経済学』、中公新書、pp. 164－182

（謝辞）

本稿は2019年の10月に宮崎県西米良村「おがわ作小屋村」地域協議会のメンバーに対しヒアリングを実施した。ここに感謝申し上げます。